

# ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 理学療法学科

准教授 関口 賢人

## 1. 教育の責任

令和3年時点での本邦における理学療法士免許取得者数は、19万人を超える。時代や社会の変化により、理学療法士の働き方も多様性をみせるなかで、学生が目指す理学療法士像も多様化している。理学療法士が持ち合わせるべき基盤となる専門知識、専門技術の習得が将来性を広げる土台となることは変わらないが、変化する時代において医療・介護現場以外の分野にも参入できる社会性、人間性、問題解決力を兼ね備えた人材の育成が養成校教員には求められる。ここ数年で入学者の基礎学力低下とともにコミュニケーション力だけとってみても個人差の広がりを感じられる。前述した人材を育成するには、より早期から教員からの働きかけ必要であり、個人毎に抱えている問題的をいち早く明確化、教員間で共有し、個別対応を図ることが不可欠であると考え。これらの対応が入学者数の増加、高い国家試験合格率へ繋がる。

私は健康科学部の理学療法学科の教員として、理学療法学科の専門科目を中心に担当している。過去2年間の担当と授業科目は以下のとおりである。各授業のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている。

主要な担当科目は、運動器系及び徒手理学療法領域に関する理学療法の専門科目となっている。そのほか、理学療法全般の演習、実習科目および運動解剖学など理学療法士に不可欠な触診技術に関する科目を担当している。

### 2021年度

科目名	時期		受講者
運動解剖学	2年前期	必修	99名
運動器系理学療法実習	3年前期	必修	70名
マニュアルセラピー	3年前期	選択	47名
			名
			名

### 2022年度

科目名	時期		受講者
運動解剖学	2年前期	必修	74名
運動器系理学療法実習	3年前期	必修	92名
マニュアルセラピー	3年前期	選択	65名
			名
			名

## ・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 日本理学療法学会連合 日本筋骨格系徒手理学療法研究会 評議員
- 2) 標準徒手医学会副会長
- 3) 標準徒手医学会公認インストラクター
- 4) 日本スポーツリハビリテーション学会 評議員
- 5) 山梨クィーンビーズトレーナー活動
- 6) 国家試験対策委員

1-3) に関しては、日本理学療法士協会が定める専門分野の一つであり、自身の専門分野である徒手理学療法分野において、主たる活動となる。この専門領域において最新情報の取得や知識、技術を研鑽する活動を継続することが、担当科目である運動器理学療法学実習、マニュアルセラピーの講義内容の質の向上に繋がる。

4-5) に関しては、活動内で得たスポーツ領域の知識、経験を講義内容に活かすことが出来ている。特に5) の山梨クィーンビーズトレーナーの経験は、スポーツ現場における理学療法士の必要性とその役割について実体験を基に運動器理学療法学実習、マニュアルセラピーの講義内容に反映させ、現場に活用できる生きた知識を講義内で伝えている。

## 2. 教育の理念・目的

本学は、「様々な総合的問題に立ち向かうことができる問題解決力を備えた人材」を養成するため、「豊かな人間力」、「専門的な知識・技術力」、「開かれた共創力」の三つの教育目標を掲げている。理学療法教育において、専門的な知識・技術力の習得だけでなく、他者と協調しながら、主体的に行動できる人材を養成することを教育の中心に据えている。

### 1) 主体的に働き、他者に貢献できる理学療法士の養成

医療現場において、チーム医療が求められる。場面に応じた同僚、他職種の中での自身の立場、役割に気付き、行動できる力が求められる。質の高いチーム医療に不可欠なことは他職種への理解である。他職種の仕事内容への理解がチーム内での自身の役割をより明瞭にする。これが自身、他者の役割を重んじた主体性の向上に繋がると考える。本学では、多様な医療、福祉職を目指す学生が共に学びを深められる環境にある。学生間の交流だけでなく、所属学科を跨いだ教員間の連携がより重要となると考える。

### 2) 理学療法の面白さと奥深さを分かりやすく伝える

学んでいる知識、技術がどのように社会、対象者に還元されていくかを、臨床経験が乏しい学生に少しでも理解してもらえるよう工夫した講義内容が求められる。Teams や教育アプリケーションの活用、PC、タブレット端末で臨床での実際の介入内容を画像、動画で確

認し、自身の考えを促すなど臨床場面を想定し、学生自身の現場での問題解決能力を高める教育が必要となる。実技においては、その技術がなぜその方法、手順で行われるのかを意味を理解しながら習熟度を深めることが大切である。最初から全てを指導せず、個人の到達度に合わせた課題を与え、知的的好奇心、探究心、考える力を育むことが大切である。

### 3. 教育の方法

授業開始及び終了時の基本的な挨拶や身だしなみを徹底させ普段の生活態度についても指導していく。講義以外でも学内生活においても今後社会人、医療従事者を目指す立場を意識し、礼節を重んじた行動ができるように指導していく。

#### ・現場に即した実践的授業

運動解剖学においては、理学療法士に必要な触診技術の習得に力を入れている。体表に直接水性ペンで筋肉の形状をなぞり（トレース）、視覚的に自身の触診スキル、到達度を確認する工夫を行っている。少人数グループでの練習を行い、最終的にグループ単位で制限時間を設けた実技試験を行った。課題達成のための手順、過程に関しては、自由度を高め、チームで実技課題を遂行する中で医療従事者に不可欠な協調性やコミュニケーション能力の向上、問題解決能力の向上を図れるように工夫した。また、マニュアルセラピーや運動器系理学療法学実習では、実技を中心に実施し、実技練習のデモンストレーションにおいて実施する技術の手元がよく確認できるようにカメラを使用し、複数モニターでさまざまな角度から実施方法の確認ができるようにした。

#### ・Teams を活用した授業の工夫

一昨年度よりコロナ禍の影響により、Microsoft の Teams が導入され、部分的に遠隔教育が開始となった。Teams の機能を利用したオンラインでの講義に加えて、実技技術の到達度の確認にも活用した。運動解剖学においては、講義外の時間にグループ単位で実技練習を行う学生も多く、直接教員側が触診部位を確認出来なかったが、右図のように学生が Teams で触診部位をトレースした画像をチャット機能で添付してきた内容に関して、画像に直接添削内容を加え、返信することで学生に即時的、客観的にフィードバックする工夫を行っている。



#### 4. 教育の成果・評価

##### ・運動解剖学

理学療法士に必要な触診技術の習得を目的とする科目であり、1年次に積み重ねた基礎医学（解剖学、生理学、運動学）の知識がどのようにして専門技術へ活かされるかを実体験の中で学ぶ機会となる。学生からは、実際の組織の構造、機能の理解が深まった、実技を行う中で他学生との交流を深めることもできたという肯定的な意見が多かった。講義内容として技術のデモンストレーションにおいては、事前に解剖図をデータ、紙媒体で配布し、図と実際の身体構造を照らし合わせることで、学びを深められるように工夫をした。その際、後方の学生にも細かな技術を確認できるように専用のカメラを設置し、複数モニターで実技を実施する教員の手元を確認できるようにした。このような工夫により、実技練習による学びをより深めることができたという。講義内で使用する教科書に関して、一部図がわかりにくいという指摘があった。こちらの教科書に関しては、理学療法士として不可欠な機能解剖に関する記述が多く、国家試験対策、臨床実習に活用できるものを選定している。図がわかりにくい点に関しては、追加の資料を配布することにより対応しているが、今後も継続的に学生の意見を求め検討していく。

##### ・マニュアルセラピー

選択科目ではあるが、特に運動器理学療法領域において理学療法検査・測定から評価にいたるまでの技術の再確認、臨床推論等、幅広い内容を含んでいる。より臨床場面を意識した内容となるため、学生からは、専門技術の実践能力が高まった、自身が理学療法士として働くイメージが持てたなど肯定的なものが多かった。一部専門領域に特化した内容にはなるが、直近の国家試験では、理学療法士が用いる手技の一つである PNF（Proprioceptive Neuromuscular Facilitation：固有受容性神経筋促通法）や徒手理学療法に関する問題もわずかながら出題されており、講義内で実技を含めて説明することで、国家試験実技問題への対策の一部となっている。講義内では、学生が専門的なテクニックの習得のみを目的としないように指導している。1年次に学んだ基礎医学の知識の熟達が可能にする確かな検査・測定技術の向上、協会、各専門学会、部会が定めるプロトコルに沿った理学療法の実践能力の向上を大前提として、マニュアルセラピーにおいては、専門技術を体験的に学ぶ機会であることを伝えている。理学療法士の一部の専門領域に触れる大事な機会となるため、高い水準の学びが提供できるように自身も最新の知識、技術を取り入れ、講義内に反映していく。

## 5. 今後の目標

短期目標：講義内容の改善、学生への早期の介入

実技科目を比較的多く担当している立場において、外部での臨床経験や実技講習会で得た最新の知識、技術を講義に反映させていく。臨床、対象者を想定した医療従事者としての立ち振る舞い、専門技術の実践において、ここ数年で個人差がより広がったと感じる。講義内だけでなく、日々の大学生活の様々な場面において教員側から早い段階で積極的な介入、関わりを持つことがより重要であると考え、自身も日頃から関わりを多く持つように心がける。

長期目標：学生が目指す専門家に必要な土台づくり

時代の変化により、理学療法士の働き方も多様性が広がるなかで、学生が目指す理学療法士像も多様化している。しかし、理学療法士が持ち合わせるべき基盤となる知識、技術の習得が将来性を広げる土台になることは変わらない。専門家に必要な確かな知識と技術、社会人に不可欠な礼節の大切さを伝える中で自身も学ぶ姿勢を忘れず、日々研鑽に努めていく。あわせて、変化する時代において医療・介護現場以外の分野にも参入できる社会性、人間性、問題解決力を兼ね備えた人材の育成に努める。